

第三章 御坊祭の行事

第一節 祭礼の準備と練習

御坊祭は、九月一日の氏子総代会で祭礼開催の可否、日程等が話し合われ、それを受けて翌九月二日に祭典行司会を開き、祭礼のスケジュールや運営について協議する。

九月上旬、氏子組ごとで「初寄合」が行われる。初寄合では、行司から祭典行司会での決定事項が報告され、氏子組として祭礼行事への参加の有無、練習や氏子組の諸行事の日程などを協議する。

九月中旬、小竹八幡神社宮司、氏子総代表、各氏子組の行司、若連本部役員、学校・警察関係者等が出席して合同懇談会が開催される。そこで、祭礼のスケジュールの確認、関係機関への届出書類等の確認、宵宮の夜に行う若連行事の報告がある。

初寄合が終わると、各氏子組では「宿開き^{やどひら}」が行われる。宿とは、祭礼までの期間中、各氏子組の準備や練習をする場所をいい、若衆宿や若中宿と呼ぶ若手の祭礼参加者が集う宿と世話人や取締以上が集まる殿中宿（連中宿）や世話人宿と呼ばれる宿がある。中には、氏子組全体で一か所を宿としている組もある。

上組は、大正時代頃に祭礼用の上組公會堂（現椿会場）を建築し、若中宿に定めた。古くは順番や抽選によって当番で民家を宿としていたが、近年は地域の集会所を宿として使っている氏子組が多くなっている。



3-1 祭典行司会



3-2 初寄合（上組）

宿が開くと獅子舞、四つ太鼓の乗り子、轆轤し、道中笛、踊りなどの練習が始まる。屋台を離す道中笛は、小学生や中学生が多く参加しているが、どの組でも女子が参加している。

四つ太鼓の乗り子は、小学生の男児が務め、祭礼当日、顔に隈取りを入れ豪華な陣羽織を着て、四つ太鼓の上で太鼓を叩く。四つ太鼓に乗れるのは四人、二人乗りの子供四つ太鼓を出す組でも最大六人と限られている。乗り子に選ばれるのは名誉なことであることから各組で疑義が生じない方法で乗り子を決める。

中組では、期日までに希望する子供自身が若中宿にある黒板に氏名を書き意思を表明する。募集を締め切った後、若中が年齢や諸条件を考慮して乗り子を決定する。若中が乗り子の自宅に赴き、決定の報告を行う。

上組では、乗り子募集の回覧をまわし、希望者が多い場合は抽選をしている。

下組では、八月下旬頃から九月の初寄合までに若中が諸条件に合う子供を探して依頼し決定している。

春日組では、希望者は四つ太鼓の練習し、九月の下旬に選抜を経て決定し、最終全体総会場で任命式を行っている。



3-3 四つ太鼓の練習風景（中組）



3-4 笛の練習（下組）



3-5 獅子舞の練習（東園組）

練習と並行して、各組では祭礼に向けての諸準備や寄付集めが行われる。

そのなかには、幣串を神社に持っていく。

御坊祭では、傘鉾と屋台に御幣を取り付ける。

そのための幣串は、各氏子組で保管、管理しているが、それを九月中旬に神社に持つていくのである。神社では、幣串に紙垂をつけ、紙幣を挟み「小竹八幡神社御祭禮 ○○組」と墨書し、御祓いをして九月下旬に各組に戻している。

奴装束の背中につける組印を手作業で作成する氏子組もある。濱之瀬組では若中、御坊町では取締が行っている。

他にも、九月下旬に濱之瀬組は御旅所の準備、上組は元宮の清掃、十月一日以降に中組は神社の提灯付けなどの諸準備を行う。

御坊町は濱之瀬組が御旅所の管理、準備しているということから十月一日前後に取締が酒をもって挨拶に行く。上組、中組、下組との間にも若中同士の挨拶ごとがある。

名屋組、上組、紀小竹組では獅子舞を披露し合う。十月一日には、紀小竹組の行司以下役付きが名屋組の宿に向かい、名屋組では、氏子総代、行司以下役付きが出迎え、紀小竹組が獅子舞を披露する。獅子舞の披露後、飲



3-6 幟差しの練習（春日組）



3-7 傘鉾、屋台につける御幣

食をともにし交流する。次に、名屋組は上組の宿に向かい、獅子舞を披露、飲食をともに交流する。十月二日には、返礼として名屋組が紀小竹組へ、上組が名屋組へ行き、獅子舞を披露する。

十月一日、各氏子組は氏子組それぞれの区域を指す地下に幟を立てる。組ごとに幟を立てる場所、本数が決まっている。御坊町や春日組以外は、各組地下の境界に立てる。他に総代の自宅前、宿などにも立てる。中組は、午前中に幟を立てるが、他の組は、九月三十日の夜から準備をして日付が変わる十月一日の〇時過ぎから幟を立てる。以前は、十月一日午前中に行っていたが平日の午前中だと人が集まらないという理由で夜に変更した組もある。御坊祭の幟は、先端部分に笹竹を付けるので直前に笹切りを行っている。また、幟立てと同時に傘鉾を立てる組もある。

神社の境内には、上組が「八幡宮御神前」、中組が「小竹宮御神前」の神社幟を立てる。

十月一日の夜から四つ太鼓や屋台の地下まわりが始まる。御坊町では、獅子舞の当番組が屋台を担いで地下内の若中宿をまわる。

十月三日は、「ならし」「肩ならし」「足固め」と呼ばれる地下まわりの日である。朝から祭礼に向けて最終準備が行



3-8 名屋組の宿で紀小竹組の獅子舞



3-9 御旅所の準備（濱之瀬組）



3-10 神社の幟立て

われ、夜になると宴会の後、獅子舞、奴踊などが披露され、四つ太鼓が組内をまわる。

第二節 宵宮

十月四日は宵宮^{よみや}である。

御坊祭では宵宮の日のことを「傘揃式^{かさそろしき}」と称する。令和元年度小竹八幡神社祭礼予定表にも十月四日、宵宮（傘揃式）と記載されている。

傘鉾は、二・五mから三mほどの長さがある心木の上部に木製の傘骨枠を組み立て、傘枠の上から傘幕を垂らしたもので、傘の頂部には神社から授与された御幣を立てる。

午前中に御坊町を除く八組が傘鉾を神社へ運び、玉垣前の所定の位置に立て、神社境内に八組の傘鉾が揃う。御坊町だけは傘鉾は神社ではなく、総代の自宅



3-12 傘鉾を神社の所定の位置に立てる



3-13 傘鉾



3-11 ならし（下組）

前に立てる。

各氏子組の宮入までのスケジュールは、次のとおりである（平成二十三年（二〇一一）から二十六年（二〇一四）収集資料、聞き取り調査）。

中組は、七時三〇分から屋台で地下まわりを行う。殿中宿では、八時から傘鉾の飾り付けをして九時三〇分頃から傘鉾を神社の所定の位置に立てる。一一時頃から屯所^{とんしょ}を出発して一二時から宮入する。屯所とは、宮入前に氏子組が最初に集まり待機する場所である。氏子組ごとに場所が決まっている。（3-18）

濱之瀬組は、八時三〇分に宿になっている浜ノ瀬住民会館で出立式を行う。出立式では、区長、行司、世話人筆頭から挨拶があり宴会をする。一〇時三〇分に地域内にある恵比寿神社で獅子舞を奉納した後、一二時五〇分から宮入をする。

下組は、一一時三〇分に幟、四つ太鼓、屋台が通称三角広場から屯所に向けて出発する。一三時二〇分頃より屯所を出発し、一三時四〇分頃から宮入する。

名屋組は、八時に傘鉾を神社へ立てたあと、一〇時頃から屋台で地下まわり



3-14 屋台の地下まわり（中組）



3-15 総代宅前の獅子舞（春日組）



3-16 宵宮元宮前の風景（上組）



3-17 宵宮元宮での奴踊（上組）



3-19 初渡奉告祭



3-20 渡御に使用する威儀物（お道具）

をする。屯所を出発して、一四時三〇分頃から、宮入する。

東蘭組は、八時三〇分に宿になっている集会所に集合し、八時四五分から一時四〇分まで屋台で地下まわりをする。途中、総代及び行司の自宅前で獅子舞を披露する。一三時に宿（集会所）に集合し、一三時一五分に式典（鏡割）を行い、一三時三〇分に屯所に向け出発する。一五時二〇分から宮入する。

上組は、傘鉾を若衆宿である椿会場で組み立て、神社の所定の場所に立てる。また、八時三〇分から若衆宿で屋台を組み立てる。一二時三〇分に若衆宿に集合し、地下まわりをする。地下まわりの最後に元宮で奴踊、獅子舞を奉納し、一五時に屯所に到着する。一六時一〇分から宮入する。

紀小竹組は、前日の肩ならしでまわらなかつた地域を、四つ太鼓、屋台で地下まわりをする。一三時に屯所に集合し、一四時三〇分頃から屯所を出発する。一七時から宮入する。

春日組は、本宿になっている春日会場を屋台を担いで出発し、氏子総代二人の自宅前で短縮した獅子舞を披露する。一四時三〇分に宿（会場）に集合し、一五

時に出陣式を行い、一五時三〇分に屯所に向け出発する。一六時頃屯所に到着し、一七時五〇分から宮入する。

神社では、午前中に「初渡奉告祭」が行われる。これは、前年の祭礼以降に生まれた当歳児（男児）が奴装束を着て親に抱かれて宮参りし祈祷を受ける。

平成三十年（二〇一八）は、定員二十人で八時三〇分から三〇分おきに行われた。

また、九時から渡御に使用するお道具の準備が行われる。

一二時から御坊町を除く八組の宮入が始まる。中組、濱之瀬組、下組、名屋組、東蘭組、上組、紀小竹組、春日組の順で各組持ち時間は五〇分である。各氏子組とも、屯所から芝の手前まで幟、四つ太鼓、屋台の順で巡行する。芝と



3-18 宵宮屯所図



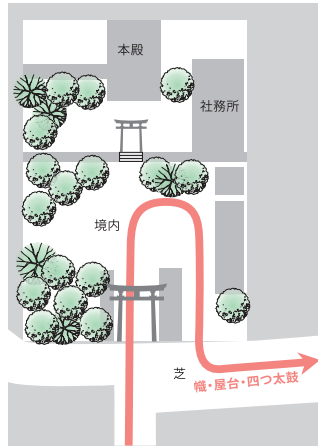
3-22 四つ太鼓を何周も回転させる（紀小竹組）



3-23 境内に入る四つ太鼓（名屋組）

は神社の鳥居前の広場である。宮入中は、他の氏子組は芝に入ることができず、宮入が終わると宮入中の行司が次に宮入する氏子組の行司に終わりを告げ、これをもって次の組は芝に入り、宮入する。

宮入は、はじめに幟を芝で差し上げ、その後、境内に入り、もう一度幟を差し上げる。次に、四つ太鼓を地面に下ろし「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囃子で四つ太鼓を押しながら芝へ入り「サイテクリヨウ、サイテクリヨウ」の囃子とともに四つ太鼓を高く差し上げ、乗り子が大きく反り返る所作をする。再び、四つ太鼓を地面に下ろし、「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囃子で四つ太鼓を何周も回転させた後、「サイテクリヨウ」の囃子とともに四つ太鼓を差し上げ、地面に下ろし、「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囄子で四つ太鼓を押しながら境内に入り、本殿正面



3-21 小竹八幡平面図（宵宮）



3-24 御坊町の宵宮行事

で「サイテクリヨウ、サイテクリヨウ」の囃子とともに四つ太鼓を差し上げる。最後に、屋台が芝から境内へ入り、次いで、中組、上組は奴踊と獅子舞、他の組は獅子舞を奉納する。宮入の間、乗り子は地面に足をつかないよう組の人に肩車をされて神社に参拝する。

御坊町は小竹八幡神社での宵宮行事に参加せず、日高別院で行事を行う。「宿禰祭」とも呼ばれている。

一二時頃から御坊町は古寺内の浄国寺前を出発して西上組、西下組、中上組、中下組、東上組、東下組を経て、日高別院まで巡行する。鬼、先奴、額（猩々）が巡行の先導を行う。日高別院前では戲瓢踊連中が迎える。

日高別院前では、まず「御坊町」と染め抜かれた幟が日高別院前の道路で差し上げられ、片手や指一本で差し上げたり、顎や額の上にのせる曲芸が披露され、次に、鬼、先



3-25 四つ太鼓と傘鉾

表3-1 御坊町の行事の状況

	日高別院 入り開始 時刻	戲瓢踊	奴踊	獅子舞	日高別院へ 入る順番
御坊町	15時00分	15時12分～ (18分)	15時30分～ (10分)	15時40分～ (25分)	鬼、先奴、額（猩々）、幟、四つ太鼓、屋台

※平成30年（2018）の調査をもとに作成



3-28 奴踊



3-26 幟差し



3-29 獅子舞



3-27 戯瓢踊

奴、額（狸々）、幟の順で日高別院の境内に入り、境内でも幟が差し上げられる。四つ太鼓は、地面に下ろした状態で「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囃子で四つ太鼓を押しながら境内に勢いよく入る。境内に入ると「サイテクリヨウ、サイテクリヨウ」の囃子とともに四つ太鼓を高く差し上げ、乗り子が大きく反

り返る所作をする。さらに、四つ太鼓を地面に下ろし「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囃子で四つ太鼓を回転させた後、「サイテクリヨウ」の所作にうつり、これを何回か繰り返す。最後に、屋台が境内に入る。境内では、戯瓢踊、奴踊、獅子舞の順番で奉納され、御坊町の宵宮行事は終了する。

宵宮の夜は、各組の若衆頭（組頭）によって構成される若衆頭連合会主催による四つ太鼓の合同行進が県道一八五号御坊停車場線の四車線道路（通称十八m道路）で行われる。

各待機場所より若連本部前まで行進し、若連本部前では持ち時間の二〇分を使って四つ太鼓を押し。この若連行事は、戦後に始まった神社の祭礼行事とは別の余興行事であるが、多くの見物客が集まり、御坊祭の行事の一つとして定着している。



3-30 若連行事

表3-2 宵宮の各氏子組宮入の状況

	宮入り 開始時刻	屋台の鳥居 入り時刻	奴踊	獅子舞	境内 退出時刻	芝退出時刻	芝へ入る順番
中組	12時00分	12時09分	12時11分～ (6分)	12時18分～ (21分)	12時41分	12時42分	先奴、幟、四つ太鼓、額、屋台
濱之瀬組	12時44分	13時00分	—	13時8分～ (20分)	13時30分	13時34分	鬼、先奴、額、幟、四つ太鼓、屋台
下組	13時35分	13時48分	—	13時51分～ (28分)	14時21分	14時23分	幟、四つ太鼓、額、屋台
名屋組	14時27分	未調査	—	未調査	15時16分	15時17分	幟、四つ太鼓、屋台
東蘭組	15時18分	15時34分	—	15時39分～ (33分)	16時22分	16時23分	鬼、幟、四つ太鼓、屋台
上組	16時25分	16時34分	16時35分～ (7分)	16時44分～ (23分)	17時11分	17時13分	幟、四つ太鼓、先奴、額、屋台
紀小竹組	17時14分	17時19分	—	17時22分～ (18分)	17時46分	17時48分	高張提灯、鬼(2人)、幟、四つ太鼓、屋台、高張提灯
春日組	17時48分	未調査	—	未調査	18時29分	18時33分	高張提灯、幟、四つ太鼓、屋台、高張提灯

※平成30年（2018）の調査をもとに作成

第三節 本祭

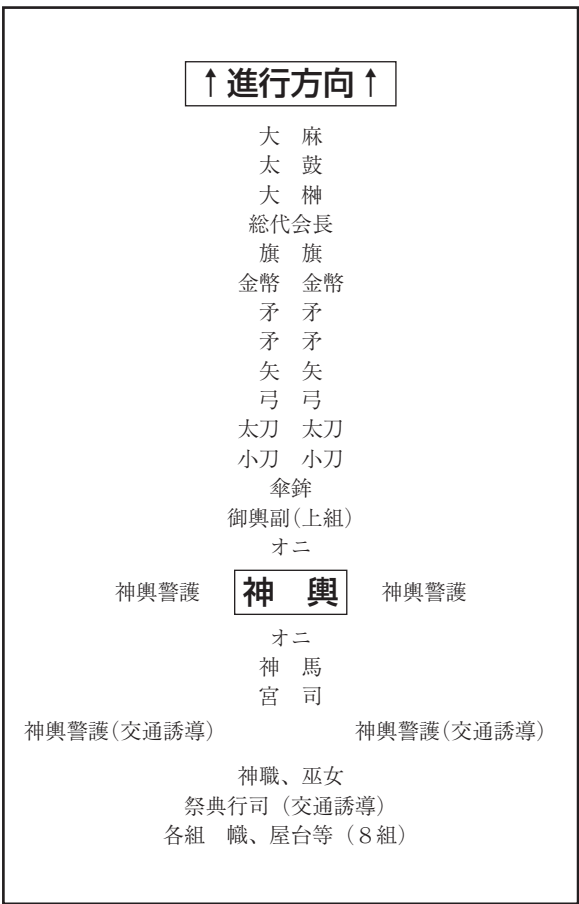
十月五日が本祭である。

小竹八幡神社で七時二五分から氏子総代、行司などが参列し、手水の儀、修祓が行われた後、参進昇殿し、祝詞の奏上、豊栄舞、玉串拝礼が行われる。（本節の表記時間は平成三十年の調査より）

その後、神輿に御霊が遷され、神輿昇きの「エエラクジャ」の掛け声のもと八時二五分から日高郡美浜町の御旅所まで渡御する。途中、神輿は煙樹ヶ浜で潮かけをする。

神幸行列の順序は、大麻↓太鼓↓大榎↓旗（金・銀）↓金幣↓矛↓矢↓弓↓大刀↓小刀↓九組の傘鉾↓上組の幟・屋台↓オニ↓神輿↓オニ↓神馬↓宮司（騎馬）↓神職↓巫女↓八組の幟・屋台の順である。

大麻、太鼓、大榎は、中組が担当し、旗（金・銀）、金幣、矛、矢、弓、大刀、小刀は、氏子総代が担当し、後に各組の傘鉾が続く。



3-31 小竹八幡神社神幸行列略図

各氏子組は、幟、屋台の順で行列に参加する。上組は「御輿副^{みこしぞえ}」と称し、毎年、神輿の前を進み、オニとともに神輿の警護をする。上組内に小竹八幡神社の旧地である元宮があることから神社の神輿の世話と警護の役割を生じているからという。

上組を除く氏子組は、行列の最後尾につく。渡御順は、中組が先頭で神社が地域内にあることから中組が先頭を勤めるといふ。中組以降の順番は、前年に最後尾の組が前にきて、その後ろの組は一つずつ順番が繰り下がる。平成三十年は、中組、下組、紀小竹組、御坊町、名屋組、東蘭組、春日組、濱之瀬組、令和元年（二〇一九）は、中組、濱之瀬組、下組、紀小竹組、御坊町、名屋組、東蘭組、春日組の順番であった。

また、前日「初渡奉告祭」に参列した当歳児も、奴装束を身にまとい各組の渡御行列の後へ付き従う。渡御行列が西川を渡る時には、「渡初」の幟を立てた船で川を渡る。

御旅所には九時頃到着し、九時一〇分から約二〇分間、献饌、祝詞奏上、豊栄舞、玉串拝礼などの御旅所祭が行われ、九時三五分から戯瓢踊が奉納される。

戯瓢踊の奉納が終了すると還御となる。一時に出発し、神社には一時八分に到着する。神輿は町を一周して神社に還るが、神輿の後に付いていた各組の幟、屋台は途中行列から離れ、一旦地下^{じげ}に戻る。

還御した神輿は拝殿に据えられ、豊栄舞、玉串拝礼などの還御奉告祭が一時一〇分から執り行われる。



3-32 船で川を渡る当歳児



3-35 各組の傘鉾



3-34 氏子総代が担当する威儀物



3-33 大麻を先頭に進む渡御行列



3-37 神輿の潮かけ



3-36 御輿副の上組

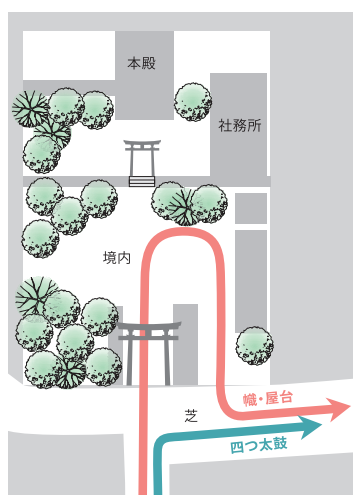


3-38 渡御ルート

一三時から境内で下組の雀踊が奉納される。一三時三〇分から上組による子供奴踊の奉納があり、芝では子供四つ太鼓が出る。一三時五二分終了する。一五時から中組、濱之瀬組、下組、紀小竹組、御坊町、名屋組、東蘭組、春日組、上組の順で宮入が行われる。各組の持ち時間は一時間と定められている。宮入は、道中を幟、屋台、四つ太鼓の順で巡行し、神社前の芝に入る。芝で幟差しが行われ、その後、境内に入りもう一度幟を差し上げる。次に、屋台が芝をまわった後、境内へ入る。境内では奴踊や獅子舞が奉納される。その間、四つ太鼓が芝で押し続ける。



3-40 屯所位置図 (本祭)



3-39 小竹八幡平面図 (本祭)

獅子舞の奉納後、幟と屋台が境内から退出する。幟と屋台が退出してしまうと宮入が終了してしまうため、四つ太鼓が幟、屋台の退出を防ぐとして幟、屋台との攻防がある。攻防の後、幟、屋台が境内より芝へ退出すると、四つ太鼓の囃子が「ライネンノー、ライネンノ、ナーゴリナーゴリオーシヤナ」に変わり、芝から退出する。宮入が終わると、行司が次の組の行司に終了を告げる挨拶に行く。御坊祭では、この行司同士の挨拶がないと次の組の宮入することができない。

宮入

一番 中組

地下の区域に神社があることから宮入順は一番となる。屋台の前を額が先導し、「先奴」が、幟、屋台の進行を仕切る。四つ太鼓は、大人四つ太鼓と子供四つ太鼓の二台が出る。奉納芸は奴踊と獅子舞である。

宮入を終えたあと、一七時頃から殿中宿前で四つ太鼓を押し、手締めで終了し、慰労の宴をする。

二番 濱之瀬組

先奴、額、幟の順に芝へ入り、その後、屋台が入る。鬼が先導し、進行を仕切る。芝へ入った四つ太鼓は高々と差し上げられた後、地面に下ろされ、四つ太鼓を何周も回転させたあと「サイテクリヨウ」に移る。四つ太鼓の杵を持ち、静止して差し上げる。また、「ホッテヤレ、ホッテヤレ」の囃子で四つ太鼓を放り投げるように激しく揺らした後、「ホーエンヤ、ホーランエーヨイヤサノサ」の囃子に合わせて四つ太鼓を差し上げ続ける。境内では、獅子舞が奉納される。

三番 下組

行司、取締、若中と雀の組印が染められた弓張提灯を手にとって宮入する。行司の合図のもと、幟がまず芝へ入る。五反の大幟には、宮入順を表す「三番」の文字が大きく染められている。屋台には常に額が前を行き先導の役割をする。境内では、獅子舞が奉納され、芝では、四つ太鼓が威勢よく押される。獅子舞の奉納が終了し、四つ太鼓の囃子が「ラインェンノ、ラインェンノ、ナーゴリナーゴリオーシヤナ」に変わる。

四番 紀小竹組

紀小竹組が宮入する頃から周囲は暗くなり、高張提灯、弓張提灯に火が灯る。高張提灯が先に行き、幟、屋台、四つ太鼓の順で芝へ入る。二人の鬼が幟、屋台、四つ太鼓の進行を仕切る。境内では、獅子舞が奉納される。四つ太鼓は、大人の四つ太鼓と子供四つ太鼓の二台出る。

五番 御坊町

鬼を先頭に、高張提灯、先奴、額、七つの組名の入った高張提灯、幟の順で芝へ入る。幟を芝で差し上げ、片手や指一本で差し上げたり顎や額の上にのせたりする幟差しが行われる。次に、屋台が芝を回った後、境内に入る。境内では、奴踊と獅子舞が奉納される。境内で諸芸が奉納される間、芝では、四つ太鼓が押される。

六番 名屋組

高張提灯が芝へ入り、次に幟が入る。芝で幟が差し上げられ、境内に入り、もう一度幟差しが行われる。次に、屋台が芝をまわった後、境内に入る。境内では、獅子舞が奉納される。一方、四つ太鼓が芝へ入り、「サイテクリヨウ」の囃子とともに高々と差し上げ、乗り子が大きく反り返る所作をする。また、四つ太鼓を地面に下ろし、「ヨーンヨイ、ヨーンヨイ」の囃子で何周も回転させたあと「サイテクリヨウ」にうつる。次に「ホーエンヤ、ホーランエーヨイヤサノサ」と囃子を変える。

七番 東園組

高張提灯が先導し、幟が芝へ入る。幟担当者による口上の後、五本の幟を地面を掃くように左右に大きく振ったり、交差させたりする幟差しを行う。三本

締めをし、境内に入り、もう一度幟を差し上げる。次に、屋台が芝をまわった後、境内に入る。境内では、獅子舞が奉納される。四つ太鼓は、大人の四つ太鼓と子供四つ太鼓の二台が出る。

八番 春日組

高張提灯が先に芝に入り、その後行司の合図により幟が入る。五本同時に地面を掃くように左右に大きく振ったり、交差させたりと幟を操る幟差しを行う。幟が境内に入りもう一度幟を差し上げる。次に、屋台が芝をまわった後、境内に入り、獅子舞を奉納する。春日組は、二頭立ての獅子舞が奉納される。四つ太鼓は、大人の四つ太鼓と子供四つ太鼓の二台が出る。

九番 上組

行司の合図のもと、高張提灯、幟が芝へ入る。屋台の前を常に額が行き、先導の役割を果たし、先奴が進行全体を仕切る。境内では獅子舞が奉納され、大人四つ太鼓が芝で押す。獅子舞の奉納が終わると、幟が境内より芝へ退出し、屋台は「御輿副」として神輿と練った後芝へ出る。「ライネンノ、ライネンノ、ナーゴリナーゴリオーシヤナ」の囃子のもと芝を後にし、全組の宮入が終了する。

上組の獅子舞の奉納が終了すると、神輿昇きによって神輿が拝殿から境内に担ぎ出される。神輿は上組の屋台と「ライネンノ、ライネンノ、ナーゴリナーゴリオーシヤナ」の囃子のもと練った後、再び拝殿に戻される。拝殿では、修祓、祝詞奏上、玉串拝礼等の神賑行事終了奉告祭が執り行われ、明かりをすべて消し、御霊を本殿に遷し、祭礼は終了する。

祭礼が終了すると、神社の玉垣前に立てられていた傘鉾もそれぞれの組に戻る。

表3-3 本祭の各氏子組宮入の状況

	宮入り 開始時刻	屋台の鳥居 入り時刻	奴踊	獅子舞	境内退出 時刻	芝退出時刻	芝へ入る順番
中組	15時00分	15時08分	15時10分～ (7分)	15時21分～ (18分)	15時49分	16時00分	先奴、幟、額、屋台、 四つ太鼓 (2)
濱之瀬組	16時00分	16時12分	—	16時21分～ (16分)	16時48分	17時00分	鬼、先奴、額、幟、屋 台、四つ太鼓 (1)
下組	17時00分	17時06分	—	17時10分～ (29分)	17時46分	17時55分	幟、額、屋台、四つ太 鼓 (1)
紀小竹組	17時55分	18時00分	—	18時03分～ (26分)	18時38分	18時52分	鬼、幟、屋台、四つ太 鼓 (2)
御坊町	18時52分	19時05分	19時06分～ (9分)	19時15分～ (25分)	19時44分	19時48分	鬼、高張提灯、先奴、 額 (猩々)、高張提 灯、幟、屋台、四つ 太鼓
名屋組	19時48分	20時00分	—	20時05分～ (25分)	20時36分	20時48分	高張提灯、幟、屋台、 四つ太鼓 (1)
東蘭組	20時48分	21時02分	—	21時06分～ (34分)	21時48分	21時59分	鬼、高張提灯、幟、屋 台、四つ太鼓 (2)
春日組	21時59分	22時13分	—	22時17分～ (22分)	22時48分	23時07分	高張提灯、幟、屋台、 四つ太鼓 (2)
上組	23時07分	23時10分	—	23時15分～ (25分)	23時47分	23時52分	高張提灯、幟、先奴、 額、屋台、四つ太鼓

※平成30年 (2018) の調査をもとに作成



3-41 傘鉾が地下へ帰る



3-42 獅子舞でお礼参り

祭りの翌日の十月六日を「かさ破ち^{やぶ}」と呼び、各組で幟を降ろし、傘鉾、四つ太鼓、屋台その他諸道具の解体や片付け、会計支払い、宿の掃除などを行う。一方、寄付を頂いた家々を中心に組内をまわって獅子舞を披露する。夜には、反省会を兼ねた慰労の宴が催される。

神社でも、氏子総代によりお道具納め、総代会（直会）が行われる。

第四節 祭礼料理

御坊祭における祭礼料理としては、「なれずし」と「あまざけ」が特筆される。

氏子の各家庭での祭礼料理は、祭礼参加者や祭礼見物に行く家族にとって、手早く食することができ、前もって用意ができる料理が多いといえる。旧来は、なれずし、あまざけの他に巻さずし、蒲鉾、刺身などの和食や近年では揚げ物などの洋風料理も多くなりつつある。

宿での料理は、宵宮、本祭には、なれずしとあまざけが料理として出され、稽古の期間中は、稽古終了後に夜食となる。

令和元年（二〇一九）の上組では次のとおりであった。三日の夕食は、おにぎり、蒲鉾天ぷら、揚げ物や卵焼きなどの盛り合わせ料理、宵宮の夕食は仕出し弁当、本祭の夕食は、行事終了後に夜食として鍋料理や蜆の味噌汁であった。また、本祭の昼食は、御旅所においておにぎり弁当や蒲鉾天ぷらなどであった。大鍋での料理や味噌汁以外は、外部への発注であった。

御旅所で各氏子組の行事を行っていたときは、家族や親族が御旅所でなれずしやあまざけはもとより巻さずしや蒲鉾を食した。

近年は、仕出し料理が多くなっているが、氏子組の役割として炊事と称する担当者が料理を作っていた時期がある。食材は、買物帳を用意して帳面ツケの後払いの形式で、担当者も祭りに参加できる男性のみで構成されていた例が多い。上組では、平成時代の中頃まで宿で飯炊きやそうめんの味噌汁をつくり、「にぎりこ」または子供言葉の「にんにこ」という俵型の大きめのおむすびを調理した。



3-43 御坊祭の祭礼料理

なれずし

御坊祭のなれずしは、酢を使わず、塩と米飯の発酵食品で古くからの製法である。なれずしに鯖を使う地域は、和歌山県内において御坊市を含む日高郡、有田郡である。

秋の祭礼時期に獲れる鯖は油が乗り、昼間が温かく朝晩が涼しい時候が発酵を促す。鯖にはマサバ（真鯖）とゴマサバがあるが、マサバはヒラサバ（平鯖）とも言い、なれずしには旬であるマサバを使用する。

硬めに炊いた米に濃い塩水を均等にまぶす。または、炊飯の際に少量の塩を入れる。鯖一尾を開き、骨抜きの後、大量の塩で漬ける。数日の塩漬けの後に水で塩抜きをして薄皮をはがし、小骨は毛抜きで取る。そして、米飯を魚の腹中に詰め長方形に整える。それをアセ（暖竹）の葉で何重にも巻き、杉製の桶に並べて重しをかける。アセの葉の色が、濃い緑からやや黄緑になると、葉の香りとともに風味が増す。おおよそ七日ほどでなれずしができるが、桶に仕込む日数や気候でなれ具合が変わる。薄切りした新生姜を添えて食する。

御坊市御坊（横町）の橋本家では、なれずしの記録がある。橋本家には本家伝来の「橋本台所年中行事控帳」があり、大正二年（一九一三）の九月の項目に「すし 大さば 百ニ付 米一斗三升 米一升に付き鹽八匁 米一升二水



3-45 ジャッキ付すし桶



3-44 なれずし

「一升二合」と記されており、大サバ百に対し
て米が一斗三升必要
で、米一升到水が一升
二合、塩八匁の割合で
なれずしを作っていた
ことがわかる。

大正十四年（一九二五）十月四日付の紀南新聞に「お祭氣分の變化 廢れる
ナレずし 文化の響か、不景氣の因か」の記事中に「昔から日高平野ではお祭
りには馴れ鮮に甘酒がなくてはならぬものといつて（中略）年中の鮮は年に一
度の秋祭りに喰ひ溜めて附近村の親類知已に迄配るといふ有様で資産や交際に
應じてといふよりは農家でも商家でも苦面して迄成るたけ澤山擔へるのが一種
の誇で」と記され、各家のお手製の「なれずし」を互いに配り合う風習があつ
たことがわかる。

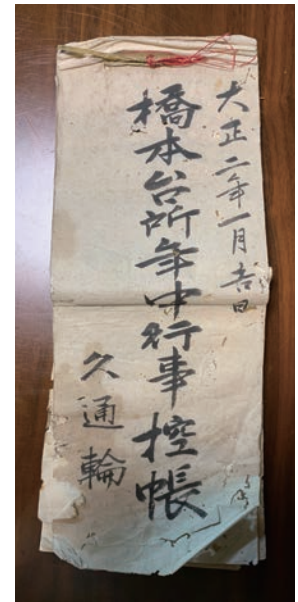
あまざけ

御坊祭の「あまざけ」は、一般的な酒粕を
お湯で溶かした温かい飲料とは異なり、米と
麴で発酵させたアルコール分を含まない甘味
がある常温の飲料である。

造り方の手順は、麴花と良く磨いて柔らか
く炊いた米を杉板製の木箱（もろぶた）で、
それぞれを均等になじます。それを温かいう
ちに甕に仕込む。甘酒専用の甕はあらかじめ
殺菌を兼ねて熱湯で温めている。水は沸騰さ



3-47 あまざけ



3-46 年中行事控帳

せ、約四十度に冷まして甕に注ぎ、軽く攪拌する。この甕入れの際の甕内の温
度が発酵を促すのに重要となる。氣候による屋内の温度が低い場合、白布など
で包んで納戸に置くなど家ごとに工夫がある。約三日から五日であまざけがで
きる。

「橋本台所年中行事控帳」には、「あまざけ はな 三まいに米二升」と記
されている。

巻きずし、蒲鉾

なれずしとあまざけが祭礼料理の中心であるが、「巻きずし」や「蒲鉾」も食
膳に上がる。

巻きずしの具材は、シイタケ、かんぴょう、高野豆腐などを甘辛く炊き、そ
れらを酢飯の上に芯として海苔で巻いたすし
である。

蒲鉾は、御坊周辺では「くずし」とも呼ば
れている。角形で丸型の焼き印がついた
なんばやき「南蛮焼」や、煮しめた牛蒡に魚のすり身を絡
ませ、魚皮で巻いて仕上げる製法の「牛蒡巻」
ごぼうまきがある。魚が盛んである御坊市周辺は、蒲鉾
の製造業者も多い。蒲鉾は、現在においても
高価な祭礼料理であり、箸を用いなくても手
際よく食べることができるので重宝される。



3-48 巻きずしと蒲鉾

